

日本地域学会ニューズレター

平成 13 年 no.2

平成 13 年 9 月 10 日

目 次

I.	日本地域学会第 38 回年次大会 (平成 13 年 10 月 20-21 日) 参加登録, 宿泊予約等について	...	2
II.	平成 13 年度日本地域学会総会 (平成 13 年 10 月 20 日) 出席のお願い	...	2
III.	会員通信		
	1. The 17th Pacific Regional Science Conference 報告	...	3
	2. ブラジル滞在記	...	3
IV.	理事会報告	...	7
V.	<i>Papers in Regional Science</i> への投稿を募る	...	9
	第 38 回年次大会 宿泊のご案内 宿泊施設の予約等	...	10
	正会員入会申込書	...	12

I. 日本地域学会第38回年次大会（平成13年10月20-21日）

平成13年度(2001年度)日本地域学会第38回年次大会(実行委員長 青山吉隆 京都大学教授 日本地域学会理事)が、京都大学工学部(吉田本部キャンパス)において下記要領で開催されます。

記

開催校: 京都大学
開催日: 2001年10月20日(土)-21日(日)
会場: 京都大学 工学部5号館, 土木総合館
606-8501 京都市左京区吉田本町
tel.075-753-5759
fax.075-753-5759
参加費: 4,000円
懇親会費: 4,000円*
写真代: 1,000円*
(*希望者のみ)

なお、昼食は各自でおとり下さい(当日、付近のレストランなどの地図が用意されます)。以上

ここに当日のプログラムが同封されていますので、会員諸賢におかれましては同封の官製はがきで必要事項に回答のうえ(締切9月20日(木)),奮って参加いただけますようご案内申し上げます。

同封のプログラム後半に、

- (1) 会場略図と連絡先
- (2) 懇親会会場略図

が、またこのニューズレター後半に、(3) 宿泊施設予約案内

が掲載されていますので、各自ご予約下さい(宿泊予約申込締切9月28日(金))。また、下記学会ホームページでも同様の情報を入手できます。

http://jsrsai.envr.tsukuba.ac.jp/AnnualMeeting/cover_38.html

例年どおり、初日(10月20日(土))には平成13年度総会および平成13年度日本地域学会学会賞授与式が行なわれますので、ご出席いただけますようお願い申し上げます。

II. 平成13年度日本地域学会総会(平成13年10月20日)

日本地域学会 会員 各位

日本地域学会 会長
山村 悦夫

本年度総会を下記要領で開催いたしますのでご出席下さい。なお、欠席される場合には同封の官製はがきにて委任状をご提出下さい。

記

平成13年度日本地域学会総会次第

日時: 平成13年10月20日(土) 13:20 - 14:20

場所: 京都大学 土木総合館 155号室

京都府京都市左京区吉田本町

tel.075-753-5759

fax.075-753-5759

1. 開会の辞
2. 会長挨拶
3. 来賓挨拶
4. 議題
 - 1) 新入会員・退会希望者の承認
 - 2) 名誉会員の承認
 - 3) 平成12年度収支決算の承認
 - 4) 平成13年度収支予算の承認
 - 5) 第39回(2002年)年次大会の開催地、開催校等の承認
 - 6) 第40回(2003年)年次大会の開催地、開催校等の取り扱いの承認
 - 7) その他
5. 報告
 - 1) 新入会員キャンペーンの継続
 - 2) 『地域学研究(第32巻)』編集委員会の構成
 - 3) 『地域学研究(第31巻)』の編集
 - 4) *Studies in Regional Science* Vol.31, No.2
 - 5) RSAIの動向

6) PRSCO の動向

7) その他

6. 学会賞授与式

1) 選考経過報告

2) 学会賞授与

功績賞: 河上省吾, 福岡克也

論文賞: 多和田眞

奨励賞: 田中正秀, 井上知子

3) 受賞者挨拶

7. その他

8. 閉会の辞

III. 会員通信

1. The 17th Pacific Regional Science Conference 報告

2001年6月30日から7月4日まで、米国オレゴン州ポートランド市にある Embassy Suites Downtown ホテルで The 17th Pacific Regional Science Conference (以下、PRSCO17 と略記) が開催された。筆者も PRSCO17 の末席に参加した関係から、簡単に会議の状況を報告しておこう。

Embassy Suites Downtown ホテルはポートランド市のほぼ中心部に位置し、歴史も古く最近改築されたばかりで、市内でも有数の大きさを持つホテルであった。PRSCO17 の参加者はかなりの割引料金で、高級な客室に宿泊できるという特典があった。6月30日は一般参加者の registration および Cocktail Reception があった。

7月1日は前日に引き続き registration があり、8時30分からは PRSCO Council Meeting が開催された。筆者も Council Member であるため、この会議に参加した。主要な議題は2003年に予定されている第18回 PRSCO についてであった。PRSCO18 は2003年の6月30日から7月4日まで、メキシコのアカプルコ市で開催されることが決定した。この会議に引き続き RSAI Council Meeting が開催され、午後の1時15分からはホテル内の6つの会場に分かれて session が開始された。PRSCO17 で

は前 RSAI 会長の河野博忠先生を記念して、"Session in Honor of Hirotada Kohno" が3件開催されたことが特筆される。そしてこの日の夜には Welcoming Reception が開かれ、多数の参加があった。今回の参加者も150名を越える規模で、日本からの参加者も地元アメリカに次ぐ数で、50名前後であった。

一般 session の内容は紙面の関係もあり詳細を述べることはできないが、地域経済分析、立地論、経済地理、交通、地域環境、地域情報などの従来型の分野が多かったが、ポートランド市が環境共生都市として有名であることを配慮して、Urban Growth Management の session があり、大変興味深いものを感じた。

7月3日には午前中の session のあと、午後からは excursion が催された。これは Columbia 河峡谷に沿ってバスで観光名所を見学するもので、日本では見られない雄大な景色が印象的であった。Excursion の後、市郊外部にあるレストランで Conference Dinner Party 行われ、当地での名物であるサーモン料理を堪能した。

翌4日は最終日であり、午前中の session に引き続き Conference Lunch が催され、5日間の親交の別れを惜しんだ。この日の夜には独立記念日を祝う花火大会が市内河川敷で行われ、多数の市民が花火見物に訪れていた。

David A. Plane 教授を始めとする local organizing committee の方々の尽力により、極めて成功裏に運営がなされていたといえる。ここに local organizing committee の方々への感謝の意を表しつつ、筆を置きたいと思う。

(寄稿: 宮田 譲, 豊橋技術科学大学 教授)

2. ブラジル滞在記

昨年の9月半ばより国外研究の機会を与えられ、サンパウロ大(ユニバシダージ・ジ・サンパウ、ウースピー: USP) 経済学部のお世話になりながら、4代半ばにして初めて海外長期滞在を経験している。良きにつけ悪きにつけ、日本との様々な違いを日々体験し、この1年近くはその意味で、たいへん刺激に富む期間となった。

ブラジルの面積は約850万平方キロメートル、ざっと日本の23倍の国土に、日本の約3分の4倍

に当たる約1億7千万人の人々が暮らしている。16世紀植民地時代を経て、原住民のインディオにポルトガル系白人、奴隷として導入された黒人が加わり、さらに19世紀末からは、奴隷制廃止後の労働力として、西欧系、東欧系、中近東系、アジア系住民が流入、まさに人種のるつぼといった土地柄となっている。サンパウロ市街で見かける人々も、大柄な人こそ少ないものの、顔つき、肌の色も様々で、まるでSF映画の中の世界であるかのような印象を受けた。

ブラジルには台風も来ず、地震もないため、サンパウロ市街地にはその対策がほとんど行われていない高層建築が、未来都市さながら林立している。日本人としては、少なからず不安を覚えるが、実際にレンガ造りの100年、200年前の建物がしゃんとしているのだから、限りなく小さい確率のために高額な投資が行われないのも、自然な成り行きなのかもしれない。

国土は大きく北部、北東部、南東部、中西部、南部と地域区分されるが、熱帯の北部と温帯湿潤な南部では、また海岸部と高地では気候にも大きな違いがある。首都ブラジリアの例外を除けば、ブラジルの地域開発は、砂糖、金、ゴム、コーヒーと続く輸出景気に対応して、北東部から南東部へ地域を移しながら、東海岸部が河川沿いに進められた。私が日本から持参したポ和語辞典は、インテリオール・ド・ブラジウに対して、ブラジル中心地方というりっぱな誤訳を載せているが、実はブラジルの田舎と訳すのが正しいようだ。このように人々の地理感覚の中にも地域開発の歴史の違いが反映されていて、たいへん興味深く感じた。

サンパウロ市は、コーヒーの生産開始に伴って、19世紀に急拡大した都市である。その人口は約1800万人、人口3400万人のサンパウロ州の州都となっている。サンパウロ市の気候の特徴は海拔800メートルという高地特有のもので、1日のうちの気温差がたいへん大きい。サンパウロ市の北東、海岸線にあるリオデジャネイロ市、人口500万人に比べると、真夏でも夜は涼しく、逆に冬場は肌寒いということになる。このためか、予想外に蚊も少なく、日本と違って蟬の声さえあまり耳にせず夏を過ごした。市内でエアコンが完備している場所は稀で、わずかな時間我慢しささえすれば、扇風機なしで暮らせないこともない。人一倍汗かきの私は市中をハンカチなし

では歩けなかったが、バスや地下鉄で汗を拭く人々の姿をほとんど見かけないのも意外だった。

ブラジルの公用語はポルトガル語で、市中で英語が通じないことは、日本でもよく知られている。しかし、住居としたアパートの受付を始め、当初から利用せざるを得ないタクシー、スーパー、大学内の食堂や売店などでも言葉が通じないので、かなりもたつくことになり、苦しい体験であった。

受入れ責任者となっていたいただいたアゾーニ学部長の薦めで、ポルトガル語の個人授業を受け始めたものの、ラテン語系の言語に関する基礎知識と語彙力がないため、私の進歩は非常に遅かった。薦められて地下鉄の駅に近く、近所にレストランも多い現在のアパートに転居してからも、行き先の住所を書いたメモを運転手に見せては、大学と住居の間をタクシーで往復するだけの日々がしばらく続いた。ポルトガル語を習い始めて間もなく、食堂で何とか聞き取れた金額を、釣銭の必要がないように支払うことができたとき、係りの人が親指を立て、ブラジル流オーケイのサインを出してくれ、さすがにうれしかった。2ヶ月半ほど個人授業を受けたところで、少し慣れたと判断されたのか、薦められて経済学部の提供する「外国人のためのポルトガル語」のクラスに入ることになった。このクラスでは、日本、フランス、メキシコ、オランダ、チリ、アメリカなどから来た学生と一緒に授業を受けた。彼等と一緒に学ぶ過程で、日本人がポルトガル語学習上いかに重いハンディを抱えているか、思い知らされることになった。ポルトガル語と親戚関係にあるスペイン語を母国語とする学生はもちろん、まだ習い始めたばかりというフランス人の学生でさえ、私が全く聞き取れないスピーチを、ほぼ100パーセント理解できたと平気で答えるのである。

サンパウロ市は世界最大の日系人社会がある都市だから、日本語もかなり通じるのではと思われる方もあるだろうが、中年以上の日系人だけが集まる教会とか、日本企業の駐在員関係者が集まるポルトガル語クラスとか、ごく特別な場所を選ばなければ、日本語での会話を耳にすることはない。有線放送の中には、NHKの総合テレビが放映されているものもあることを後に知ったが、私の利用したNETという有線放送では全く扱っていなかった。日系三世の技官のホジェリオさんから教えてもらい、ハジオ・

ニッケイというラジオ放送を三日がかりで雑音の中から探し出したとき、しばらく相当に曖昧なヒアリングに浸され続けて生活したためか、日本語だとどうしてこうも隔々まで明確にわかるのか、不思議な感じがした。

日本人街として紹介されたリベルダージの商店街も、鳥居、ラジオ体操の記念碑、盆提灯の形をした街灯があり、一見すると日本風の佇まいである。しかし、実際は台湾人、中国人、韓国人の経営する店も多く、そこに働く店員もブラジル人客に異国情緒を感じさせるため、意識的に「いらっしゃいませ」「ありがとう」と発しているケースが多かった。そのようなレストランでは、御飯を有料のジュースや水と一緒に食べるという取り合わせも、ごく普通である。日本人がまともと感じる和食を手頃な値段で楽しむには、リベルダージでも飛び込みではなく、先達にレストランを紹介してもらった方が良さそうだ。日系人でも、実は三世くらいになると、日本への出稼ぎなどで例外的に日本語を獲得した人を除けば、早くも日本語を失っている場合が多いのである。日常会話に全く問題がないように思われる技官の竹下さんでさえ、古今亭志生の落語「井戸の茶碗」のテープを聞いてもらった反応は今一つだった。ブラジルで社会的活動に必要とされる外国語としては、英語、スペイン語の方が日本語よりはるかに優先順位が高い。三世、四世という若い日系ブラジル人にとって、ポルトガル語と完全に異なる言語体系を持つ日本語の敷居は高い。日本への出稼ぎでも考えない限り、いかに日系人とは言え、日常生活や仕事で必要とされない日本語を学ぶ強い意欲を期待するのは、とても難しいことのように思われた。お祖母さんだけが日本人という日系三世の例を挙げると、彼女は日本語を失っているだけでなく、外見的にも日本人的な特徴が認められなかった。

USP は、サンパウロ市内北西部、シダージ・ウニヴァシタリアと呼ばれる地区の広大な敷地内にあり、正門から経済学部まででさえ、歩けば30分以上かかる距離だった。巡回バスのサーキュラー1と2が無料で運行されており、近所の一般市民や子供たちまで乗せて20分間隔くらいで運行されている。道路は、大きさによって、アヴェニエダ、フア、アラメーダと区別して呼ばれ、慣行として人の名前が付されたものが多い。ちなみにUSPの経済学部

の建物が面する道は、アヴェニエダ・プロフェッソール・ルシアーノ・グアルベルトという。サンパウロの地図には、このように長い名前が極端に小さい活字でびっしりと書き込まれている。まだ着いて間もない頃、ショッピング・センターの本屋で苦勞して求めた市街地図も、私の持参した小さい虫眼鏡では、自分のいる場所さえ確認できないまま、ダウンという日々が続いた。

外務省の危険情報によると、サンパウロは危険度1とされており、治安の悪さは日本でもよく知られている。ブラジルの大都市では、日本と違い女子人口の割合が高いそうだが、その理由に治安の悪さが挙げられるほどだから、やはり相当なものである。日本では乗用車が安全と思いがちだが、こちらでは決してそんなことはない。特に信号待ちの長い交差点では、輸入高級車とされる日本車に乗って、日本人が強盗に襲われる事件が少なくない。経験者の話によると、道路脇から突然走り寄られて窓越しに銃を突き付けられては、前は他の車でつかえており、お手上げというのである。しかも、警察では民事事件として扱われ、加害者側と被害者側は警察署の待合室で、しっかり対面することになるのだそうだ。加害者側からの復讐を恐れて訴えない人々も多く、訴えるにしても引越し覚悟でという状況とのことである。

7月の半ばには、地下鉄の駅構内でもわずか200へアイス相当の切符を盗んだ強盗が、軍警との銃撃戦の末に射殺されるという事件や、切符売場の窓口が強盗に会うという事件も起きた。私が安全と思って利用してきた地下鉄も、絶対安全とお伝えすることはできない。しかし、中心部のセー広場、パウリスタ通り沿いの公園の中など、いくつか特に注意を受けた場所を避けて、私が買い物や通学に地下鉄やバスを利用した範囲では、全く危険を感じたことはなかった。

私が初めてサンパウロ市の地下鉄を利用した日、驚いたことに駅構内で、私に道を尋ねたブラジル人がいた。このことをアゾーニ学部長に話したところ、次のような返事が返ってきた。「だからこそ、サンパウロは日本人にとって安全なのだ。」一般のブラジル人と区別がつかない軽装で口さえ開かなければ、日系人の多い土地柄、私が日本から着いたばかりの外国人か、日系ブラジル人か識別できるブラジ

ル人はいないというわけである。都市建築学部長のロンカ先生によると、貧民窟が都市周辺部に隔離されていることも、リオと比べ危険な場所が限定されており、サンパウロの安全性を高めているとのこと、殺人事件数から単純な危険度比較をすると、実態を誤解することになりそうだ。ブラジルの紙幣は100、50、10、5ヘアイス (reais)、1ヘアウ (real)、硬貨は1ヘアウ、50、25、10、5 センターポス (Centavos)、1 センターポである。金額表示上、日本と大きく違う点は、ポイント (小数点) の代わりにヴィーグラ (カンマ) を、3桁区切りにポイントを利用する点である。こちらに来て間もない頃、こんなことにも大いに戸惑った。政府の鑄造予算不足と激しいインフレを経験した人々の小銭軽視の風潮によって、市中に流通する硬貨が不足しているのだそうだが、銀行の窓口でさえ、釣銭のセンターポスを適当に四捨五入してしまい、わずかな釣銭はくれたりくれなかったりする。日本人の常識が通じない外国にいることを、こんなことから痛感させられた。サンパウロ市の地下鉄やバスは、現在1ヘアル40センターポスの全区間統一料金で、時刻表なしに運行されている。5分間隔くらいできちんと運行され、かえってブラジルらしくないという評価さえ耳にする地下鉄については、時刻表なしでも全く支障はないが、1時間1本くらいのバス便については、非常に使い勝手が悪かった。少し慣れてくると、通過時刻がおぼろげにわかるが、それでも天候や客足しだいで、30～60分と待たされることになるのである。しかも、バスに乗車意思アリと合図しないと通過してしまうシステムなので、のんびりベンチに座って本など読みながら待つというわけにもいかない。5月下旬にバス代が2割値上げになったが、直後のバス車内には、市民の不満が高いとされるベンツ製バスの老朽化問題を改善するという掲示があった。「サンパウロ市は、既に230台の新車を取得、10月までに1000台の新車を投入します。市の交通を改善しようとしているのは市役所です。」

公共サービスを受ける上で、人々は待たされることに慣れきっているのかもしれない。銀行口座を持ってない市民も多い中、自動引落としサービスがないため、銀行の窓口にはいつも長蛇の列がある。支払い窓口の前にベンチなどなく、人々は床のガイドラインに沿って並び、立たされたままひたすら順番

を待つ。私も住居費、雑費 (コンドミニウム)、電気代、有線放送代などの支払いのため、毎月2回ほど列に並んだ。サンパウロに来て間もない頃、ルスにある連邦警察まで、銀行口座作成に必要な身分証明書 CPF、個人識別用の RNE の申し込み、証明書の受け取りに必要なプロトコルの受け取り、証明書本体とプロトコルの交換に足を運んだが、待ち時間は何と2時間くらいずつだった。私は当事者だからまだ致し方ないが、同伴してくれた国際協力事務室の方には、全く申し訳なく感じた。ブラジルの請求書には、期限過ぎの支払いの課徴金が明記されており、支払額の20%という高額の延滞金が記載されている場合もある。インフレの激しい時代に意図的に支払いを遅らせる風潮があり、これを防ぐ目的で始められた名残だそうだが、既に期限を過ぎて請求書が届くようなこともあり、言葉が通じない中ではたいへん困った。いつも私の手には負えず、学部長秘書のカーチャさんに助けを求めることになったが、請求者側のこのような間違いは日常茶飯事とのこと、もちろん謝罪などもない。ブラジルは自然の恵みの大きい国であり、電力の9割以上を水力に依存しているが、昨年来の降水不足のため、現在深刻な電力不足に陥っている。4月末から対策の検討が始まり、停電を避けるため居住者20%、産業35%の削減案が示され、7月から実施の運びとなった。具体的には、昨年4～6月の3ヶ月間の平均電力使用量に基づいて、各供給上限が決められている。貧民窟に1割以上が盗電されていると言われるこの国だが、その内容は施行期間内2度の超過で、配電ストップという厳しいものである。昨年4～6月は日本にいた私にも、しっかり前の居住者のデータに基づく最大使用量、146キロワットアワーなる案内が届いた。ガス給湯システムや蛍光灯への取り替えが進む中、家庭電化製品の工場ではレイオフが始まっている。この政策は9月以降の雨季が始まるまでの暫定措置だったはずだが、2、3年継続される見込みという報道もある。

多くの日本人がブラジルのことを、単純にサッカーとカーニバルの盛んな発展途上国と思っている。平均をとって比べれば、先進国日本があらゆる指標で優れていることは間違いのない。国内総生産は約8000億ヘアイス、日本の10分の1に満たず、一人当たり所得では14分の1程度となる。国の定めた子供

二人の標準世帯の最低賃金は180ヘアイス、1日に家族4人が300円余りで生活しなければならない。失業率はサンパウロでも17パーセント程度というから、最低賃金も確保できない家庭がかなりあるはずである。しかし、ブラジルについては、平均概念に依拠した判断は危険である。所得水準、教育水準、生活水準など、あらゆる指標の散らばりが大きいからである。応用経済研究所IPEAが7月に発表したジニ係数は、59パーセントである。日本の家計調査1995年全世帯からの計算結果は25パーセントだった。感度が良いとは言えないジニ係数で、これほど大きな差があるということは、ブラジルの所得格差が日本からは想像しがたい水準にあることを示している。因みに上位1割が所得の5割を、下位5割が1割の所得を分けている状態とのことである。

また、グローバル化の進む中、個人レベルでの対応を考えると、一般的日本人の方が、ブラジルの上流階級よりはるかに不利な立場にいる。彼等の方が日本人より、言語、文化、距離、資金、宗教、人種など様々な点で、アメリカ社会にも圧倒的に溶け込み易いからである。他方、ブラジルの日系人は、国内での社会的評価も極めて高く、日本語は失っても日本人の血が流れていることを誇りに思っている。日系三世の中には、自分の名前の中に日本名も残して欲しかったという人が少なくないと聞いた。日系移民一世の働きぶりは高く評価されており、彼等が子供の教育に熱心であったことが、今日の二世、三世の社会的活躍を支えている。ブラジル社会は、日本人の正直、誠実、勤勉、真面目…など、古風な日本人的価値観をたまに笑い話とすることもあがあるが、他のアジア人と異なる日本人の優れた徳目として、これらを正当に評価している。ブラジルには、日本人らしさを残しながら、世界に通用する日本人像を模索した模範解答の一つがあるようだ。

(寄稿: 中馬正博, 西南学院大学 教授)

IV. 理事会報告

1. 平成13年次 第1回理事会 (持ち回り)

日時: 平成13年1月17日 (水) 17:00

議題1. 新入会員の承認

4名の正会員希望者を審議に付し、承認が得られた。

議題2. 日本地域学会『地域学研究』掲載論文等の執筆要綱を定める規程の一部を改正する規程の件
標記の規程につき審議に付し、承認が得られた。

2. 平成13年次 第2回理事会 (持回り)

日時: 平成13年2月22日 (木) 17:00

議題1. 東アジア環境共生シンポジウムの後援の件

標記につき審議に付し、承認が得られた。

議題2. 新入会員の承認

6名の正会員希望者を審議に付し、承認が得られた。

3. 平成13年次 第3回理事会 (持回り)

日時: 平成13年3月23日 (金) 17:00

議題1. 新入会員の承認

5名の正会員希望者を審議に付し、承認が得られた。

4. 日本地域学会 平成13年度 第4回理事会

日時: 平成13年4月15日 (日)13:00-14:30

場所: 日本交通政策研究会 会議室

出席者: 有吉, 井原, 太田, 大西, 木村, 熊田, 酒井, 鈴木, 関根, 高橋, 田中, 多和田, 戸田, 信国, 氷鉤, 藤岡, 三友, 山村の各理事 (ただし青山, 今泉, 加賀屋, 河上, 黒川, 河野の各理事より委任状付託); オブサーバとして白井, 宮田の各監事; 萩原, 松行の広報副委員長; 中川, 松中の年次大実行委員会委員および同幹事; 櫻井, 澁澤, 森島の各学会幹事; 坂田学会事務局秘書

審議事項

1. 新入会員・退会希望者の承認

前回理事会 (持ち回り) 以降, 申込のあった6名の正会員 (個人会員) の入会と14名の正会員の退会希望を審議し, 次回総会に諮る事を諒承。

2. 平成12年度決算 (案) の審議と承認

これに関して氷鉤総務担当常任理事より報告と説明があり, 白井監事からの監査報告の後審議を行い, 報告どおり次回総会に諮る事を諒承。

3. 平成13年度予算 (案) の審議と承認

これに関して氷鉤総務担当常任理事より提案説明があり, 審議の後, 原案どおり次回総会に諮る事を諒承。

4. 平成13年度会費未納者の措置

これに関して氷鉋総務担当常任理事より、例年通り理事に督促を依頼するとの提案があり、これを了承。

5. 第38回年次大会プログラムの編成方針

中川大会実行委員会幹事より、以下の提案があり、これを諒承。

1) シンポジウムのテーマ『集客都市戦略 - 京阪神三都の魅力 - 』

2) 5月末まで大会発表希望を募集する。

なお、プログラム編成は次回理事会で行なう。

6. 『地域学研究』セット販売の推進

これに関して氷鉋総務担当常任理事より各理事の本務校図書館への販売協力の要請があり、これを諒承。

7. 新入会員勧誘キャンペーン

これに関して氷鉋総務担当常任理事より引き続き理事在任中に各2名の新入会員を推薦することを目標とすることが確認され、これを諒承。

8. 第39回年次大会の開催地及び開催機関

これに関して氷鉋総務担当常任理事より北星学園大学での開催を交渉中であるとの報告があり、これを諒承。

9. 名誉会員の推薦

これに関して熊田名誉会員推薦委員会委員長より3名の候補者がおり、本人の承諾を得た後、理事会の推薦で総会にはかかることが提案され、これを了承。

10. その他

1) JHDP 主催シンポジウムの共催

これに関して氷鉋総務担当常任理事より環境共生学会とともに標記日本学術会議 HDP 委員会主催のシンポジウムを共催することが提案され、これを諒承。なお、今後この種の共催に関する審議は適宜持ち回り理事会で行われることとなった。

2) 財源負担の軽減

これに関して、山村会長より通信費等の削減をはかるためのinternet活用方策、機関誌特別会計への一般会計負担をできる限り縮小するための方策等の検討を進めることが提案され、これを了承。

3) *Papers in Regional Science* 機関購読の推進

これについて氷鉋総務担当常任理事より標記編集委員会からの協力依頼について説明があり、これ

を強力に推進することで了承。あわせて、同誌への投稿を会員に勧誘することを了承。

5. 平成13年度第5回理事会（持回り）

日時: 平成13年4月25日（水）17:00

議題1. 新入会員の承認

8名の正会員希望者を審議に付し、承認が得られた。

議題2. 「HDP シンポジウム in 仙台」（2001年6月16日（土））の共催

日本学術会議 HDP 専門委員会より標記の依頼がありこれを承諾する事を審議に付し、承認が得られた。

6. 日本地域学会 平成13年度第6回理事会

日時: 平成13年6月13日（日）13:00-14:30

場所: 日本交通政策研究会 会議室

出席者: 青山, 井原, 木村, 熊田, 河野, 酒井, 鈴木, 関根, 高橋, 田中, 多和田, 信国, 氷鉋, 福地, 藤岡, 山村の各理事（ただし, 有吉, 今泉, 河上, 黒川, 戸田, 原, 三友, 矢田の各理事より委任状付託）; オブサーバとして臼井, 宮田の各監事; 櫻井, 渋澤, 森島の各幹事; 坂田事務局秘書

審議事項

1. 新入会員・退会希望者の承認

前回理事会以降, 申込のあった24名の正会員（個人会員）の入会と3名の正会員の退会希望を審議し, 次回総会に諮る事を了承。

2. 第38回（2001年）年次大会並行セッション及びシンポジウムのプログラム編成方針

これに関して, 青山大会実行委員長よりシンポジウム編成について報告の後, 氷鉋総務担当常務理事より, 申し込みに基づく原案が提示され, 座長および討論者を決定。座長, 討論者の依頼およびその他の調整は事務局に一任。

3. 平成13年度会費未納者の措置

これに関して氷鉋総務担当常任理事より, 引き続き督促についての協力依頼があった。なお, 長期滞納者については関連する理事を通じて督促し, 納入されない場合には会則第10条第1号の措置等の検討に入ることを了承。

4. 『地域学研究』セット販売の推進

これに関して氷鉋総務担当常任理事より, 引き

続き各理事の本務校図書館への販売協力の要請があり、これを諒承。

5. 新入会員勧誘キャンペーン

これに関して氷鉤総務担当常任理事より、引き続き理事在任中に各2名の新入会員を推薦することを目標とすることが確認され、これを諒承。

6. 事務局幹事の交替

これに関して氷鉤総務担当常任理事より、岡嶋幹事が本務校で多忙なため、水野谷剛会員と交替する事が提案され、これを諒承。

7. その他

1) 会員に関する規程

これに関して氷鉤総務担当常任理事より、規程を整理し、原案を作成する事が提案され、これを諒承。

2) 学会賞

これに関して、関根No.1編集委員長より、学会賞に著作賞を創設する方向で原案を作成する事が提案され、これを諒承。

3) 論文審査料・掲載料の徴収

これに関して山村会長より、『地域学研究』の出版費増大に伴い論文審査料・掲載料の徴収および超過料、抜き刷り代の改定実施について提案があり、事務局で原案を作成することを諒承。

V. *Papers in Regional Science* への投稿を募る

Information about Papers in Regional Science:

Papers in Regional Science is the official journal of the Regional Science Association International. It encourages high quality scholarship on a broad range of topics in the field of regional science. These topics include, but are not limited to, behavioural modelling of location, transportation, migration, land use and urban development, interindustry analysis, environmental and ecological analysis, resource management, urban and regional policy analysis, e-commerce, innovation processes, geographical information systems, and spatial statistics. The journal publishes papers that make a new contribution to the theory, methods and models re-

lated to urban, regional and international matters. Besides full papers, shorter notes and comments (up to 5 single spaced pages) are also welcome. All submitted papers are subject to a so-called "double blind" refereeing process (that is, the author and the reviewer do not know each other's identity). *Papers in Regional Science* is one of the leading journals in the field. You are warmly invited to send FOUR COPIES of your best current research paper to the Pacific Editor:

Professor Jacques Poot
School of Economics and Finance
Victoria University of Wellington
P.O. Box 600
Wellington, New Zealand